



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四―四四三九二

大谷羊太郎

偽装他殺

Yôtarô Ôtani ©1978

カバーイラスト／吉田昭夫 デザイン／矢島高光

本文挿絵／居島春生

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 国田昌子〉

書下し長篇本格推理

偽装他殺

大谷羊太郎



TOKUMA NOVELS

偽裝他殺●目次

第一章●危険信号……9

第二章●密閉された現場……32

第三章●音響装置……57

第四章●自殺説の根拠……82

第五章●出張捜査……103

第六章●自殺否定説……128

第七章●不意の別れ……152

第八章●脱出口……175

第九章●美しき悪女……200

第一章 危険信号

1

ネクタイ売場は、カラフルな色彩に満ちていた。

春が近いせいであった。長く重苦しい冬に、人々はうんざりしていた。季節を先取りするデパートは、こ
とさら色あざやかなネクタイで、売場を飾り立てたようである。

エアカーテンで仕切られた玄関口は、出入りする客たちで混み合っていた。ネクタイ売場は、その近くにあった。

仲杉信光は、ライター売場のウインドケースをのぞき込んでいた。並べられた商品を、ゆっくりと見くらべながら、からだを移動させてゆく。

買う意志などは、少しもなかった。単なるポーズなのである。花畑を気ままに舞い飛ぶ蝶のように、彼は売場から売場へと動いてきた。目的の場所は、ネクタイ

イ売場だ。しかし、最初からそこに近づくのは危険であった。へひょっとして、誰かに見張られているかもしれない。

その怯えは、四六時中、彼の背にまとわりついていた。そして、とりわけ緊張を強いられるのが、これからはじまる取引きの現場であった。仲杉は、右手にア
タッシュ・ケース、そして左手にショッピングバッグを提げていた。紙バッグの方は、Sデパートのマークが、大きく印刷されてある。一見、無造作に扱っている。

その底には、Sデパートの包装紙にくるまれた箱が入っている。20×10センチ、そして厚みが5センチほどの大きさである。誰が見ても、ここで買い込んだ品物に映るだろう。しかし紙バッグもこの箱も、事務所を出るとき、仲杉が社長の時宗司郎から預ったものであった。

「中に五十万円入っている」と言われ、アタッシュ・ケースの底に押し込んで出発した。途中、ほかの用事でラジオ局に寄り、それからこのデパートに入った。トイレの中で、ケースから箱と紙バッグを取り出し、こうして手に提げて売場に入ったのだ。

これは、紙バッグごと相手に渡す麻薬の買付け代金なのである。仲杉は、さりげなくライター売場を離れ、ネクタイ売場の方に移った。黒っぽい地味なスーツの袖口に、ちらっと目をやる。腕時計の針は、二時二十八分を指していた。

へもう、近くまでできている頃合いだが

これまで重ねてきた取引きでも、絶対に約束の時刻を違えない相手であった。金と品物との交換についても、完全と言える相互信頼が成立っていた。先方も、Sデパートの紙バッグを手に行っているはずだ。

仲杉は、飾られたネクタイの品定めをする振りを装いながら、あたりの様子をうかがった。首を大きく回すような、目立つ動きは避けた。鏡の反射を巧みに利用した。

一階のこのあたりには、鏡をはめ込んだ柱が多い。それに、ネクタイ売場だけに、ケースの上に姿見も配置してある。仲杉は、ネクタイの一本を手に取り、鏡面の角度を直してその前に立った。

フロアの雑踏が、卵形の鏡面に映し出された。尾行者らしき人影も見当たらない。ここにくるまでに、万一の尾行には充分に注意した。相手側も、そうしてい

るはずである。

ふと仲杉は、鏡に映る自分の姿に見入った。三十五歳だが、三十そこそこといった感じにしか見えない。いつも人にそう言われる。へ瘦型だし、膚も若いからな

贅肉のつかない体質だった。外形にそろそろ中年の兆しが見える年齢なのだが、彼は例外のようであった。へ喜ぶべきか、悲しむべきか

鏡の中の自分を見つめて、彼は心の中でつぶやいた。若さを売りものにする歌手や、あるいは女性の場合だったら、いつまでも細胞のみずみずしさを願うだろう。へしかし、おれは男だ。年齢相応の仕事をして、もっと風格を身につけたい

現実の惨めさが、彼の心を暗くした。

すぐ、気を取り直した。人生を嘆いているひまはなかった。彼は胸ポケットに押し込んであった白いハンカチを、ほんの少しだけ引っぱり出した。

ハンカチの白色は、「こちら異常なし」の暗号サインなのである。先方も白ハンカチを示せば、お互いの安全が確認されたことになる。二人は、店の奥にあるエレベーターの方向に、目立たぬよう移動する手はず

だ。そして乗り降りする際の混雑に乗じて、ひそかに取引が行われる。

五十万の現ナマが入った紙バッグが、相手の手に。同時に、卸値で金額相応分の麻薬セット入り紙バッグが、仲杉の手に。チャンスを見て、金とブツとの交換は一瞬のうちに済まされる。ともにSデパートのマーク入り紙バッグであり、混んだ人ごみの中での指先の素早い作業だから、他人に気づかれる虞おそれはない。

仲杉は胸に当てたネクタイを、ガラスケースの上に戻し、鏡から視線を離れた。わずかに顔の向きを変えた。間近にある支柱の一つが、鏡張りになっている。へきたぞ

身を固くした。鏡は、仲杉の背後を映していた。流れる人波の中に、小岩勇の姿を認めた。黒のスボンに、白っぽい上衣を着ていた。仲杉とは同じ年齢だが、すでに腹がせり出しかけている。

仲杉は、ネクタイを選ぶ仕草を続けながら、次第に近づいてくる小岩を、鏡の中で観察した。

へ少し妙だな、今日の彼は

仲杉は、小首をかしげた。舶来地の服を身につけ、腕に金張りの時計をはめた彼は、いつもどっしりと構

えている。小規模ながらも、貿易商社取締役の肩書を持っているのだ。それにふさわしい挙止を、常に心がけている男であった。

だが、今日の彼は違った。どこか、オドオドしている。小岩は、まっすぐに仲杉の方にやってきた。

へおかしいぞ、これは

ネクタイ売場では、お互いの安全を確認するのが目的だった。離れた地点で、ハンカチの色を示し合うだけだ。それ以上接触しては、尾行者があった場合、二人の関係に気づかれる不安がある。なのに小岩は、約束事を無視して、仲杉のそばに寄ろうとしている。その上、手には何も持っていない。

へなぜなんだ

仲杉は、あわてた。そして次の瞬間、心臓が大きく波打った。小岩は左手に、ハンカチを固く握り込んでいた。指の間から、わずかにはみ出しているその色は、赤であった。赤は、最悪の危険信号を意味していた。

2

小岩は、仲杉の横に並んだ。女店員が、すぐに近寄

ってきた。仲杉が安物のネクタイをいじっている間は、見向きもしなかった女だ。恰幅の差を、仲杉は感じた。「あれを見せてくれ。壁にかけてあるブルーのストライプ」

胸を張り、小岩は鷹揚おうように命じた。だが声には怯えがこもっていた。仲杉だけが、敏感にそれをさとった。彼の言葉が、第三者を遠ざける口実なのも、すぐに感知した。

小岩は、前方にある鏡の柱を凝視し続けたまま、唇にハンカチを当てて、軽くせき込んだ。これもジェスチャーのようだ。そのままの姿勢で、低い声を洩らした。

「ターウのリモに危険を知らせろ」

赤のハンカチが、どのような危機をもたらせているものか、定かには判らない。小岩の身に迫っているのは、警察なのか。それとも、黒い獰猛どうもうな組織なのか。いずれにしても、小岩の方に直接に顔を向けることはできなかった。監視の目がそばまで伸びているのなら、二人の結びつきをさとられてしまう。

仲杉も、鏡をさりげなく見やり、そこに映る小岩の様子をうかがうしかなかった。彼の目は、明らかに血

走っていた。そして、鏡面に鋭い視線を注いでいる。尾行者というより、追跡者を恐れている瞳であった。その瞳が、大きく動いた。表情が、恐怖にゆがんだ。人波の中に、追ってきた敵の姿をとらえたのか。

「ほかの人間には言うなよ」

その一言を残すなり、彼は身をひるがえした。素早い動きであった。鏡面から、彼の姿は消えた。仲杉は、反射的に消えた方に視線を向けようとして、ぐっとこらえた。あくまで二人は、無関係な他人でなければならぬ。

壁からネクタイをはずしてきた女店員が、客のいないのに気づいて、眉をひそめた。

仲杉は、ゆっくりとその場を離れた。ごく自然な動作に見せて、まわりを見回した。目つきの鋭い男が、出入口の方向に足早に去っていった。その男が小岩の敵なのかどうかは、見定めるすべもなかった。

だが、小岩の危機は、ストリートに仲杉の危機に通じる可能性があった。彼の背筋を、悪寒がはいのぼった。仲杉は、男たちが向かったのとは反対側の出入口に、足を進めた。デパートを出たとたん、ぐんぐんと歩速をあげた。国電有楽町駅の北口が、間近に迫って

きた。

ガードをくぐり、銀座方向に足を速めた。楽器店、貴金属店、デパートなどを出入りして、足跡をくらませた。尾行者を振り切る手段であった。それらしき影は、感じられなかったが、慎重に行動しなければならぬ。

昭和通りまで出て、公衆電話のボックスを見つけた。事務所に電話して、社長の時宗を呼出した。

「どうだ。うまくいったか」

しわがれた声であった。はじめて耳にする人間には、ドスの利いた声とを感じるだろう。

「それが、出演契約は不調に終わりました」

「えっ、不調だって？ いったい、なぜだ」

時宗は、おどろきを隠さず、せき込んで訊き返した。これまで小岩との取引きは、すべて順調に行っていたのだ。

「詳しくは判りません。ディレクターは説明してくれませんかでしたからね」

「台本の色は、ブルーだったのか、それとも緑か」

「赤でした」

「赤——」

絶句した時宗の口から、吐息が尾を曳いた。最悪の危険度を示す赤が現われたことは、彼にとっても、かなりのショックに違いない。

「判った。事情をさっそく調べてみよう」

気を取り直したらしく、時宗はしっかりした声で言った。寄り道をしてから事務所に戻る、と仲杉は告げて、電話を切った。

暗号まじりの電話だったが、事務所への報告もひとまず済ませた。ホッと気がゆるんだ。仲杉は提げていた紙バッグを、アタッシュ・ケースに納めた。

ドアを引いてボックスを出た。どんよりとした空が、頭上にあった。タバコに火をつけた。

昭和通りを行き来する車の列を、ぼんやりと眺めた。一息ついた気分であった。タバコの味が、うまいと思った。

だが、気を抜いたのも束の間だった。二つの不安が、胸を締めつけてきた。

へ小岩の身に、何が起こったのだろう

異常事態の発生に、間違いはない。警察が彼に目をつけたのかもしれない。麻薬犯罪は、環の一部が捕捉されると、あとは芋づる式に検挙される例が多い。

へひょっとして、おれの手首にも手錠が

およそ犯罪とは、無縁の人生を送ってきた。平凡な一市民として、地道に生きてきたつもりである。

へそれが、こうして泥沼にはまり込むなんて

仲杉は、運命を呪いたかった。彼は、ただの運び役に過ぎない。状況も判らなければ、事態に対処する能力もない。彼のボスである時宗に、すべてを一任するしかなかった。

彼は、もう一つの不安の方に、思考を向けた。小岩が残した謎の言葉だ。こちらは、彼だけが拘わりを持った問題になった。

しゃれた喫茶店が目についた。仲杉は、その方向に歩みはじめた。コーヒーの香りの中で、考えてみようと思った。

3

高校時代、仲杉には上田という友人がいた。上田は高校を中退して、ロックバンドのバンドボーイをしていた。その縁で、仲杉もよくバンドマンのいる楽屋に遊びにいった。上田に手を貸して、楽器の運搬などを

手伝った。だからバンドマンたちは、いつ行っても仲杉を歓迎してくれた。

もともと彼は、学業に興味はなかった。進学の雰囲気薄い私立の三流校だった。学歴コースなど、最初から諦めていた。それに引きかえ、バンド界は自由で派手で、そして活気があった。次第に彼は、この世界に惹かれるようになった。

高校をどうにか出ると、正式にバンドボーイになった。ベース弾きが、奏法の手ほどきを教えてくれた。従来のウッド（木製）ベースから、電気ベースに切りかわる時代であった。

やがて彼は、一本立ちをした。はじめはランクの低いバンドで、給料も安かった。腕があがるにつれ、一段ずつ上級バンドに移籍して、稼ぎもふえた。

彼は十二年間、ベース奏者として過した。そして三十歳のとき、ステージを降りて芸能プロの社員になった。仲間の多くが、同じ道をたどった。

女性ファンに囲まれて、賑やかな職場で過すのは、たしかに楽しかった。だが二十代もなかばを越す頃から、将来性について悩みが生まれた。

へ今はいいが、先はどうなる

よっぽどの音楽技術がないと、この道で生活は立たない。まして日本のロックは、サウンドよりも風俗現象でまず根をおろした。ロックン・ロールのオーバード・アクションが、人の目をおどろかせ、興味をあおり立てた。音楽そのものの技術面は、アクションの陰に隠れた。

だから、歌手も演奏者も、未熟なうちからステージに立てた。仲杉もその一人だ。軽薄なブームが遠ざかるにつれ、不安感が湧き出してくるのは当然であった。

芸能プロに新しい職場を求めたのは、ほかの世界に踏み込むためのコネや才覚がなかったからだ。ステージから一步引込めば、そこからはプロダクションの領域である。転職とは呼べないほどの、安易な変わり身であった。

へしかし、いっこうに芽は出なかったな

仲杉は、喫茶店の片隅で、回想にふけていた。午後のひととき、内部は閑散としている。バンドマンをやめてから、五年が経ち、その間、三つの芸能プロを渡り歩いた。現在の星陽アーチストに勤めてから、一年半になる。

ウェイトレスが、注文したコーヒーを運んできた。

回想が断ち切られ、現実が呼び戻された。小岩が言い残した言葉を考えるために、この店に飛び込んだのだ。ヘタウのリーモと、彼は言った。いったい誰のことだ

バンドマン仲間では、やたらに語句を倒置して、隠語めかしてしゃべり合う。昔から確立した習慣であり、それは彼らばかりか、芸能界の内部にかなり広まってしまった。ターウはウタの倒置であり、歌手の意味がある。リーモはモリの倒置だ。恐らく人名だろう。

へ森という歌手か

仲杉は心当たりを探った。何人かの男女の歌手の顔と名が、脳裡にうかんだ。特につき合いの深い相手はいなかった。

へまして、麻薬がからんでいるとなると

いっそう、判らなくなった。小岩が危険を伝えたいのは、疑いなくヤクの取引先の一人に違いない。

へ誰なのだろうか、そいつは

まったく、見当はつかなかった。思考の視点を変えてみた。あれだけの言葉で、仲杉なら判断できると、小岩は思ったのに違いない。森という歌手は、一人ではない。特定の人物を選び出す手がかりは、いったい